



日本語による国際交流の実践について：
「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の成果
を踏まえて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井口, 裕太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000397

日本語による国際交流の実践について

——「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の成果を踏まえて——

井口裕太

キーワード 国際交流 協働 オンラインミーティング ICT コミュニケーション

1 実践の背景

平成30年告示の高等学校学習指導要領(以下、新学習指導要領)による学びが令和4年度入学生から始まり、その多くが令和6年度に卒業を迎える。3年間1サイクルの学びを終えようとしている現在は、PDCAの過程に当てはめればC(Check=検証・評価)の段階といえよう。文部科学省は2024年に、ここまでの教育活動を踏まえ、「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会 論点整理」を発表した。この中で、「1. これからの社会像とこれまでの学習指導要領の趣旨の実現状況」では、「(1)これからの社会像」として6点が挙げられ、「グローバルな協働」として、「国内外で異なる価値観を持った人々と、協働による課題解決」が求められる社会となることを指摘している。

協働は「同じ目的のために協力して働くこと」だが、このとき協力の場は現実の空間に留まるものではない。インターネットの普及と発展により、現代においては、関係者全員が同じ現実の空間に揃う場面はむしろ珍しくなった。インターネットを活用しながらリアルタイム(同期的な)作業とタイムシフト(非同期的な)作業を組み合わせ合わせて進行していくのが現代の協働である。この協働は、学校において「同じ目的のために協力して学ぶこと」と置き換えることもできよう。加えて、先述のような在り方を想定すれば、学校教育においても、教室での対面による授業を基盤としながら、空間や時間の制約を受けずに、校外や地域をはじめ、国内外を問わずさまざまな機関と結びつきながら展開する学習活動が重要になっていくことは明らかである。

こうした時代の流れに、学校現場もさまざまな形で対応しようとしてきた。現任校は令和4年度より文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業(創造的教育方法実践プログラム)」(以下、指定事業)の採択を受け、3年間取り組みを続けている。稿者はこの指定事業において、令和4年度は校内プロジェクトチームの一員として、令和5年度はこれに加えて教務主任として関わってきた。令和6年度は最終年度となるが、取り組みはこれをもって終えるものではなく、むしろ今後の学校教育の中で継承し、発展させていくべきものだ。本稿では指定事業の成果を踏まえながら、これに着想を得て展開した日本語による国際交流の実践についてまとめ、国語科におけるグローバルな視点を取り入れた学習活動の効果について整理していく。

2 本校における指定事業の取り組み

文部科学省は「新時代に対応した高等学校改革推進事業(創造的教育方法実践プログラム)」の趣旨について次のように説明している。

教科横断的な学びの実現による資質・能力の育成、デジタル人材育成を目指し、遠隔・オンライン教育(質の高い通信教育を含む。)を活用した新たな方法による学びを実現する。(1) Society5.0の実現に向けた最先端の技術を活用した学び、(2) 自らの興味関心に応じた探究的な学びに着目し、同一設置者の学校間のみでなく、他地域における大学や研究機関、国際機関等の関係機関からの同時双方向型の授業を取り入れたカリキュラム開発を行い、新しい時代の学びを創造する。

文部科学省, 2024, 「新時代に対応した高等学校改革推進事業」(事業概要)

本校は指定事業において、その構想を「遠隔等を活用した大学等の協力による持続可能な社会を担う人

材育成」と題し、「大学等とオンラインを活用した連携のもと、地域の課題解決をテーマにした探究活動を実施」することを特色として取り組みを進めた。令和4年度は上級学校との連携による成果を8件、そのほかの専門機関との連携による成果を8件、それぞれ報告している。令和5年度は上級学校との連携による成果を11件、その他の専門機関との連携による成果を20件、それぞれ報告している。取り組みの課題として、令和4年度は「(1)連携体制の強化」としてオンラインを活用した学習の積極的な実施に加え、「(2)探究活動の改善・充実」を挙げた。令和5年度はこれらの点において一定の改善が見られたが、発展の余地があった。令和6年度については今後、最終報告としてまとめる。

稿者は校内プロジェクトチームの一員として上級学校との連携協議に関わり、教務主任としてコンソーシアム会議の運営に携わったほか、教科担任としては10件(令和5年度5件、令和6年度6件)の実践を報告している。本校の成果報告より、以下に稿者の関わった実践をまとめる。

(1) 3年次「古典探究」(学校設定科目) ※令和5年度

韻文の学習に関わり、専門的な見地から助言を受けるため、札幌国際大学人文学部 大村勅夫准教授に依頼し、4回のオンラインによる講義を実施後、1回の対面による講義を実施した。

(2) 3年次「だて学」(学校設定科目) 地域紹介グループ ※令和6年度

自分たちの生活する地域の魅力を海外に発信する取り組みに関わり、海外の高校生との日本語による国際交流の取り組み(後述)に参加した。そのほか、伊達市内の観光への取り組みについて情報収集することを目的として、伊達市役所や市内の観光施設、飲食店等への取材や動画撮影を実施した。

(3) 3年次「だて学」(学校設定科目) 文学研究グループ ※令和6年度

北海道を題材とする文芸の調査に関わり、市内の博物館へ取材したほか、アイヌの口承文芸についての調査のため、「北海道の先住民族であるアイヌ民族の物語をもとにした高等学校段階における創作活動」について文部科学省より科学研究費助成事業の奨励研究の指定を受けた、北海道帯広柏葉高等学校(北海道教育大学大学院) 戸川貴之教諭にオンラインドキュメントで質問を共有し、助言を受けた。

(4) 1年次「総合的な探究の時間」歴史文化グループ ※令和6年度

伊達市の地域活性化のために市政への提言を行う「学生アントレキャン」を開催した室蘭工業大学 山中真也教授にオンラインで講義を受けるとともに、これに参加した学生に取材した。また、伊達市内の観光への取り組みについて情報収集することを目的として、伊達市役所の担当者に取材した。

それぞれの実践においては指定事業の趣旨を踏まえ、「最先端の技術を活用した学び」の展開に向けて、生徒の「興味関心に応じた探究的な学びに着目し」ながら、主として Google Workspace の機能を活用して、リアルタイム作業とタイムシフト作業を並行して進めた。「同一設置者の学校間のみでなく、他地域における大学や研究機関、国際機関等の関係機関からの同時双方向型の授業」の実現に向けては、対面による講義やオンラインミーティングツール(Zoom)を活用しながら、各科目で適宜校外の諸機関とのつながりを持つことができた。

指定事業の構想において、教員全体に与える好影響として「働き方改革」と「指導力向上」が想定された。学校全体の取り組みの成果と切り分けて、稿者の実感としては、働き方改革に限れば課題があったと感じる。前述の ICT 環境の活用に関わり、新たな手法による学びをどのように創造するかを検討や実践に向けた準備に少なからず時間を要したほか、外部連携のための折衝などのため一部の担当者へ業務が集中する場面もあった。一方で、指導力向上には大いに資するところがあったといえる。専門家による講義は、授業展開に際しての導入や解説の仕方のみならず、自身がその分野について新たな学術的知識を身につけることに

もつながった。また、付随的だが指定事業に際して ICT 環境が整備されたことで、それらを活用しようとする意欲や、実際に活用することで ICT 活用指導力が向上したと考えている。

3 実践報告

(1)3年次「だて学」(学校設定科目)における日本語による国際交流の実践

前項の実践のうち、(2)における「日本語による国際交流の取り組み」を取り上げる。これは3年次の学校設定科目「だて学」の実践である。「だて学」は複数の分野に分かれ、地域を題材にそれぞれのテーマに基づいた探究的な学びを進める2単位の科目である。稿者は令和6年度の国語分野を担当した。

国語分野は課題設定のステップにおいて地域紹介グループと文学研究グループの2班に別れた。そのうち地域紹介グループは、「伊達市はその魅力を十分に発信できていないのではないか」という課題意識を持ち、自分たちの住む地域を紹介する動画を制作して発信し、その反応から伊達市の魅力を分析する活動を構想した。ターゲットは「ほかの地域に住む同世代の人々(未来の観光客)」と「日本に興味を持つ海外の人々(現在の観光客)」に設定した。次の情報収集のステップにおいて、「海外の人々は日本のどのようところに魅力を感じるのかを調べたい」という疑問が出たことが実践の端緒となる。

この疑問について、国語科における日本語による国際交流を数多く実践している北海道帯広柏葉高等学校の戸川貴之教諭に意見を求めたところ、同校で5月17日に日本語による国際交流の取り組みを開催するという情報を得て、本校(地域紹介グループ)の参加を依頼した。相手はフランス共和国の Lycée Bartholdi(リセ・バルトルディ、“Lycée”は日本における高等学校に相当)で外国語として日本語を学ぶ学生たちであり、当日は北海道釧路湖陵高等学校も参加している。

1時間程度のオンラインミーティングで、生徒たち一人ひとりがコミュニケーションを取る機会を確保するため、少人数ごとのブレイクアウトルームに分かれる形式で複数回のセッションを実施した。話題は「自己紹介」と「それぞれの国の地方都市に旅行へ行くとしたら、どんなところに興味を持つか」、その後は時間を見ながらのフリートークとしている。稿者はブレイクアウトルームを回りながら交流の様子を観察した。

交流を終えて、生徒たちは当初の目的のとおり、海外の人々(少なくとも今回交流したフランスの学生は)は日本のどのようところに魅力を感じるのかを整理することができたようだった。また、想定していたことではあるが、話題によっては会話が円滑に進まないこともあったようだ。しかし、このことも、外国語として日本語を話す人々とのコミュニケーション(いわゆる「やさしい日本語」)について考える機会となった。

地域紹介グループはその後、伊達市内の観光への取り組みについての情報収集を経て、得られた情報を整理・分析し、試行錯誤を重ねながら地域紹介の動画を制作し、発信することができた。さらに、11月の全体発表において、国語分野の代表グループとして自分たちの取り

創造的教育方法実践プログラムにおける専門家との連携			
教科・科目	だて学(国語)	実施日	5月17日(金)
単元名	事前調査		
本時の目標	海外の日本語学習者の実情を知ろう		
連携機関等	バルトルディ高校(アルザス_フランス) 教員および生徒 北海道帯広柏葉高等学校 国際交流部 教員および生徒 ※主催、参加 北海道釧路湖陵高等学校 教員および生徒 ※参加		
連携の目的	地域紹介動画の制作にあたり、実際に海外の日本語学習者と話し、日本のどのようところに興味・関心を抱いているかを調査する。		
本時・連携の内容			
1 形式 オンラインミーティング			
2 内容			
-日本語による自己紹介			
-日本の地方都市に旅行へ行くとしたら、どのようところに興味を持つか			
-フランスの地方都市に旅行へ行くとしたら、どのようところに興味を持つか			
-日本語によるフリートーク			
			
評価 (成果・課題)	海外の日本語学習者と実際に話すことで、彼らが日本のどのようところに興味を持っているか、また、コミュニケーションをとる際に気をつけなければならない話し方や語彙の選別について理解することができた。		

当日の記録(本校における報告様式)より抜粋

組みの成果を発表した。これらの取り組みについての詳細は指定事業の成果として別にまとめている。

本実践について、「だて学」は「総合的な探究の時間」の流れを汲む学校設定科目だが、分野の特性から、国語科の内容に照らして考察する。〔知識及び技能〕の内容としては、「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」のうち「言葉の働き」や「語彙」、「言葉遣い」の指導に接近することができた。また、主に「言語文化」、「文学国語」、「古典探究」で取り上げる内容であることから発展的な解釈になるが、「(3)我が国の言語文化に関する事項」の「伝統的な言語文化」とも親和性が高いと考える。〔思考力、判断力、表現力等〕の内容としては、「A 話すこと・聞くこと」の領域の全般に関わるが、今回は実際に海外の日本語話者とコミュニケーションを取ることにより生徒の学びが促進されたという点を踏まえれば、「表現・共有」が重点的な学習過程であり、中でも特に「聞くこと」の指導に接近したといえる。さらに、協力者の助力を得て稿者が設定した機会ではあるが、生徒の疑問や意欲が起点となっていることから、〔学びに向かう力、人間性等〕についても生徒に資するところが大きい。

実践を終えて、国語科の目標を達成するために「日本語による国際交流」という教材(学習材)が有意義であることを再確認することができた。稿者はこの実践に着想を得て、国語科の科目(学校設定科目「国語教養」)における日本語による国際交流の実践を構想し、より国語科の目標に引きつけた活動とすることを企図した。

(2)2年次「国語教養」(学校設定科目)における日本語による国際交流の実践

ア 単元の構想について

本校(令和6年度)は国語科の科目について、1年次に「現代の国語」と「言語文化」、2～3年次に「論理国語」、選択科目として「国語表現」、「古典探究」、「国語教養」、「実用国語」、「国語探究A」、「国語探究B」、「小論文研究」、「古典教養」、「作品研究」を設定している。「国語教養」は2年次における3単位の学校設定科目である。同じ選択群に理科の「化学」や「生物」、国語科の「古典探究」、外国語科の学校設定科目「応用英語」があることから、卒業後に大学進学ではない進路を希望する生徒が多く選択している。令和6年度は65名が履修しており、国語科2名で2教室に展開している。単元の例を挙げれば、「文章の種類(履歴書や報告書など)に応じた表現の仕方」や「さまざまな媒体(新聞や契約書)からの情報の読み取り」など、多様な進路希望を持つ生徒にとって生涯にわたり必要となる内容を、領域を問わず取り扱う。

日本語による国際交流は「話すこと・聞くこと」の領域の単元として、11月に設定した。これは2年次が12月に海外(台湾)への見学旅行を控え、主に「総合的な探究の時間」学習を進めていることがあり、科目においてもこのことに関わる学習を予定していたことからだ。本校は「グローバル・プログラム」を教育活動の特色のひとつに掲げており、これは「グローバルな視点をもって地域の課題に対して主体的に考え、取り組む」生徒の育成を目指すものだ。見学旅行での海外研修はこの活動の主軸といえる。

ここまで「国語教養」において実施した「話すこと・聞くこと」の領域の単元(言語活動)は、「相手の魅力を引き出す(他己紹介のための質問の設定とインタビュー)」、「ブックトークをしよう(表現を工夫しながら好きな本について語る)」、「多様な視点をもって話を聞いたり、自分の考えを分かりやすく伝えたりする(物語に舞台設定を借りた模擬裁判)」である。これらの学習を踏まえ、見学旅行事前学習の成果をプレゼンテーションし、台湾に詳しい海外の日本語話者(以下、本実践では「台湾の専門家」)に見てもらった活動を構想し、次のように計画した。

◎単元の指導計画

○学習到達目標等

教科名	科目名	学年	学級	単位数	担当教諭
国語	国語教養	2年次	選択群A	3単位	〇〇〇 〇 〇 井 口 裕 太
単元名 (教材・終末課題)		調べてまとめたことを確認し、新たな視点の発見につなげる (見学旅行事前学習の成果発表会)			
学習到達目標		(1) 他者とのコミュニケーションには、人間や社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする意義と効用があることを理解することができる。 (2) プレゼンテーションにおける留意点を踏まえて、見学旅行に関わる事柄の中から話題を決め、他者との多様な交流を想定しながら情報を収集、整理して、伝える内容を検討することができる。 (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。			

○単元の評価規準

●本単元における主たる言語活動

調べたことをスライドにまとめてプレゼンテーションをし、フィードバックを受けて、見学旅行に関わる新たな視点を見出す。

●各時において評価する内容

	単元の評価規準	単元における評価規準の具体
知識・技能	他者とのコミュニケーションには、人間や社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする効用があることを理解している。	当初の予想とプレゼンテーションに対するフィードバックとの異同を確認するとともに、見学旅行に関わる見方や感じ方、考え方を身につけている。
思考・判断・表現 【学習活動を通して】	プレゼンテーションにおける留意点を踏まえて、見学旅行に関わる事柄の中から話題を決め、他者との多様な交流を想定しながら情報を収集、整理して、伝える内容を検討している。	見学旅行に関わる事前調査を進め、調べたことを整理しながら、相手や目的を意識して、プレゼンテーションのための資料を制作している。
取り組む態度 主体的に学習に	各時の学習をとおして、自分なりに調べたり、表現を工夫したりしながら、粘り強く学習を進め、自らの学習を調整しようとしている。	各時の課題の提出や、リフレクションシートへの記入により、粘り強く学びを進め、自らの学習を調整しようとしている。

○指導と評価の計画

●授業の流れ（全7時間）

- ・調査グループの形成と話題の設定・・・・・・・・・・1時間
- ・グループワークによる情報の収集と内容の検討・・・・2時間
- ・プレゼンテーションおよび視覚資料の構成の検討・・・・1時間
- ・プレ発表および代表グループの選出・・・・・・・・・・1時間
- ・専門家の助言を聞く・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間
- ・フィードバックから得られた視点の整理・・・・・・・・1時間

●指導と評価の展開

時程	ねらい・学習活動	評価規準	評価方法等	留意事項・その他
第1時	□調査グループの形成と話題の設定 ＞見学旅行の事前学習に関わるグループを形成し、事前学習のテーマを設定する。	【知①】	▼授業の観察	
第2時 第3時	□グループワークによる情報の収集と内容の検討 ＞グループのなかで業務を分担し、発表資料作成のための情報を収集する。	【知①】【思①】	▼授業の観察	
第4時	□プレゼンテーションおよび視覚資料の構成の検討 ＞プレゼンテーションの相手や目的を意識し、発表内容について検討しながら資料を完成させる。	【思①】	▼資料の確認	※資料の形式は任意とする
第5時	□発表および代表グループの選出 ＞クラス内で発表し、それぞれの考えを確認するとともに、各クラスの代表グループを選出する。	【思①】	▽資料の点検	
第6時	□専門家の助言を聞く ＞クラスごとに発表し、専門家から助言を受けて自らの研修に生かす。	【知①】【思①】	▽ワークシートの分析	※当日は Zoom 学校アカウント使用
第7時	□フィードバックから得られた視点の整理 ＞事前学習で得たことを踏まえて、見学旅行の成果について整理する。	【主①】	▽リフレクションシートの分析	

※〔評価方法等〕における記号は▽主に記録に残す評価、▼主に指導に生かす評価の材料としてそれぞれ用いる

※〔評価規準との関連〕の欄については、「知①」などと記入し、〔2単元の評価規準〕と関連させる

【知】知識・技能、【思】思考・判断・表現、【主】主体的に学習に取り組む態度

○それぞれの学習活動について見取る内容

	おおむね満足できる状況	努力を要する状況（の生徒への支援）
コミュニケーションの意義の理解 ※発表に関わるワークシート 【知識・技能】	自分たちのプレゼンテーションに対するフィードバックを受けて、見学旅行において研修する際の見方や感じ方、考え方を身につけている。	課題の取り組みについて不足している内容を指摘し、再提出を促す。
発表資料の作成 ※プレゼンテーション資料 【思考・判断・表現】	見学旅行に関わる事柄の中から適切な話題を決め、それについて収集し整理した情報をどのように伝えるか検討している。	資料の中に記載すべき点を確認し、資料の内容を調整させる。
課題への取り組み状況、 リフレクションシート 【主体的に学習に取り組む態度】	多くの課題に取り組み、自らの学習調整やその成果をリフレクションシートに記録している。	課題の不明点がないかフォローし、リフレクションシートも含めた課題の提出を促す。

※各観点において「おおむね満足できる状況」を大きく超える成果が見られる場合には評価をAとする。

この単元では、プレゼンテーションの場面(学習過程における「表現・共有」の段階)ではなく資料制作に関わる検討(学習過程における「話題の設定・情報の収集・内容の検討」の段階)に重点を置いた学習到達目標を設定している。これは、ほかの単元で「表現・共有」の段階に重点を置いた学習を終えていることが大きい。ほかにも、プレゼンテーションの場面では稿者がオンラインミーティングの運営を兼ねることから、並行してこの場面を評価することは難しいと想定したこともある。加えて、学習過程のクライマックスである台湾の専門家との交流の時間を気兼ねなく生徒に味わってほしいという考えもあった。この構想について、前項の実践で連携した戸川教諭に相談したところ、台湾の専門家5名の紹介を受けた。当初は Facebook Messenger のグループチャットで稿者が学習の様子を連絡していたが、戸川教諭の助言を受け、オンライン掲示板ツールの Padlet に学習経過をアップロードすることで、生徒たちの活動を直接に共有する形式も併用した。以下、授業の流れに沿ってそれぞれの学習過程を振り返る。

イ 指導の経過について

(ア) 話題の設定、情報の収集、内容の検討

「調査グループの形成と話題の設定」では、①見学旅行で全ての生徒が研修する予定の場所、②自主研修で訪問する予定の場所、からいくつかを選び、調べてまとめるという見通しを共有した。すでにほかの科目(「総合的な探究の時間」など)でも事前学習を実施しているため、成果を確認する意味で台湾の専門家にプレゼンテーションを見せようこと、それに関わり疑問点や懸念があれば盛り込むように伝えた。「グループワークによる情報の収集と内容の検討」の場面では、昨年度の見学旅行を引率した3年次の教諭を招き、質疑応答の場面を設けて、研修場面や旅行における諸注意等の助言を受けた。

(イ) 構成の検討、考えの形成

「プレゼンテーションおよび視覚資料の構成の検討」では、収集した情報を整理し、プレゼンテーション資料を構成した。その際、相手が台湾に詳しいことから、調べていく中で分からなかったことや疑問に思ったことを中心にまとめるよう指導した。資料以外にも、見学旅行にあたり浮かんだ些細な疑問等は Padlet に話題として共有し、コメントの形で応答を得ることができた。その後、「プレ発表および代表グループの選出」では、2クラスそれぞれの中で発表し、代表グループを決定した。稿者の担当するクラスでは、この授業でもオンラインミーティングの試行を併せて実施し、専門家2名の同席および生徒へのフィードバックを受けた。



Padlet のプレゼンテーション資料に対する専門家のコメント



Padlet の話題に対する専門家のコメント

(ウ) 表現、共有

「専門家の助言を聞く」ではクラスごとに3グループずつが発表し、オンラインミーティングに参加した3名の専門家より、いくつかの話題を取り上げて生徒へのフィードバックを受けた。「フィードバックから得られた視点

の整理」は当初の予定を変更し、発表直後と見学旅行後の2回に分けて実施した。プレゼンテーションの場面では、台湾と日本のトイレ環境の違いや、「道路を渡るとき、日本よりも車が歩行者を優先しない傾向がある」、「おすすめの鳳梨酥(台湾の銘菓であるパイナップルケーキ)のブランド」など、旅行を想定した非常に具体的な助言を受けることができた。発表直後の整理の場面でも、こうした内容を記録する生徒が多かった。一方、見学旅行後の整理の場面では、「忠烈祠の衛兵が行進する音やその迫力」、「士林夜市の賑わいや食べ物匂いの強さ」など、体験したことについて五感で味わったことを記録するものが多く見られた。

ウ 生徒による学習の振り返り

授業では、単元ごとに学習を記録するリフレクションシート(様式は Google スプレッドシート)を配布している。リフレクションシートには単元の目標と毎回の授業記録、目標を踏まえて学習全体を振り返る記述欄を設けている。毎回の授業記録は「今回は何をしたか」「次回は何をするか」を簡潔に書く程度の作業メモとしており、単元の終わりに学習全体の振り返りを記述して提出することとした。

リフレクションシートでは、学習に関して、聞き手を意識してどのように資料を制作するかということについての記述が目立った。相手は専門家であり、自分たちよりも発表テーマについて熟知していることから、盛り込む内容だけでなく、省略する内容を意識する必要がある。このことは、「他者との多様な交流を想定しながら」「内容を検討」という単元の目標を達成することにつながったといえる。一方で、交流の時間については、「もっとフリートークできる時間が欲しかった」「専門家からもっと話を聞きたかった」という記述が見られた。このことは、生徒たちが主体的に「こうしたい」という意欲を持ったのに対して、言語活動の枠組みが窮屈であったことを示しており、単元構想上の課題となった。

4 実践の成果

実践の成果をまとめるにあたり、教材としての「日本語による国際交流」が持つ教育効果を確認する。本実践の協力者でもある戸川(2022)は、「日本語による国際交流」の意義と効果について次のように整理した。

1. SNS を活用した教師個人の人脈で、オンラインを活用した教科の実践は可能である。
2. 母語をもとにした交流により、第二言語の修得の壁を越えなくても心の交流ができる。
3. 拡張された相手意識を持って学習活動が活性化される。
4. 他国の人に伝わる日本語を考えることで、自分の言語を相対化することができる。
5. 翻訳ツールを使うために、現代語文法を学ぶ必要性が増す。
6. 教室での学びが実社会で生きるものとなる。

戸川貴之, 2022, 「Facebook でのつながりを活用し、日本語で世界と教室をつなぐ実践の可能性」, 『国語探究』第1号

これらの観点について、稿者の実感を踏まえて分析する。文部科学省(2016)は新学習指導要領への改訂にあたり、従来の授業が講義調の伝達型授業(インプット)に偏っていると指摘し、「話すこと」や「書くこと」などの表現(アウトプット)を含むさまざまな主体的な言語活動を通じて資質・能力を育成するよう求めた。アウトプットの目的は情報の伝達であり、そこには相手が存在する。表現の活動においてはさまざまな相手を設定するが、具体的なイメージを持ちやすいことから、クラスメイトや、教師や家族といった身近な大人を想定することが多い。これは実際に伝達の場面を設けることが容易であるというメリットも併せ持っている。しかし、私たちが実社会で関わりを持つことになる相手は当然これに留まらず、さらに今後は「国内外で異なる価値観を持った人々」とのコミュニケーションも必要となる。そうした場を教室に設定する新たな手段を模索することは、

新時代に対応した学びを企図する指定事業の目的とも重なる。報告したふたつの実践においては、オンラインミーティングにより実際に海外の日本語話者と交流する場面があることで、学習過程全体においても相手意識を強く持つことができた。加えて、交流の場では相手に応じた言い換えが必須となるので、語彙を豊かにすることの重要性についての意識を高めることにもつながったといえる。

5 教材としての「日本語による国際交流」の展望

ここまで、稿者の日本語による国際交流の実践を報告した。これらはいずれも「話すこと・聞くこと」の領域で取り入れた言語活動だが、この教材は「話すこと・聞くこと」の領域における発展性はもとより、他の領域でも取り入れることのできる可能性を持つ。

「A 話すこと・聞くこと」の領域

プレゼンテーションやインタビューなど、言語活動の場面そのものを教材としやすい領域である。反面、活動が目的化してしまいやすいともいえるため、「表現・共有」の場面に指導の重点を置くかどうか、単元計画の段階で確認する必要がある。実践においては「話題の設定・情報の収集・内容の検討」および「表現・共有」の過程を意識したが、「構成の検討・考えの形成」の過程に重点を置いた活動も可能だ。たとえば、海外の日本語話者に分かりやすい表現になっているかを確認しながらスピーチ原稿を書いたり、視覚資料を作成したりする活動に重点を置いた指導が考えられる。

「B 書くこと」の領域

成果物の交流を念頭に置いた「推敲・共有」の過程に重点を置くことが想像しやすい。一方で、「話すこと・聞くこと」の領域と同じく「題材の設定・情報の収集・内容の検討」の場面に重点を置いた授業展開も考えられる。また、戸川(2022)では「翻訳アプリを用いて互いの母語で国際交流をする」実践が紹介されている。適切に翻訳されるために翻訳ツールに対してどう入力すればよいか、情報の分量や重要度に応じて構成を考えたり、伝えたいことがうまく伝わるように翻訳するためにツールに書いたりする活動は、文章の構成を学ぶ形式的な側面と、翻訳ツールを活用したコミュニケーションという実用的な側面を併せ持っているといえる。

「C 読むこと」の領域

我が国の言語や文化に焦点を当てながら読みを深めるために、「日本語による国際交流」を取り入れることが考えられる。戸川(2022)には、「赤い繭」の読みをミャンマーの同世代の人と深め合う実践の紹介がある。また、反対に翻訳された海外の文学作品を読み、そこに描かれる情景や文化に関わる疑問について、その国の人々に取材するような活動も考えることができる。

事例を交えながら構想したとおり、「日本語による国際交流」は、国語科のさまざまな目標に応じて採用できる高い柔軟性を持つ教材だ。新学習指導要領を踏まえ、高等学校が自治体や高等教育機関、産業界等と協働して探究的な学びを実現する取り組みが数多く実践されてきているが、グローバルな視点を取り入れる意味で、海外の日本語話者も連携の有力な選択肢となる。海外との連携は外国語科に注目が集まることが多いが、「日本語による国際交流」はこれまでの国語の学習が十分に生きる活動といえる。

もちろん前述のとおり、活動そのものが目的化してしまうことのないよう留意するべきであることはいうまでもない。しかし「日本語による国際交流」という教材の根幹にある、いわば「(安全が保障されている場での)未知との遭遇」という体験そのものが生徒にもたらす高揚感や興奮は無視できない。全ての学習が生徒にとって未知のものであるとはいえ、読んでいないテキストや解いたことのない設問といった課題と違い、リアルタイムで状況が変化する生身の相手とのコミュニケーションの場面は、どんな反応が返ってくるか予想がたい点で刺激的であり、それにどのように応じるか常に思考力を働かせなければならない点で躍動的でもある。こうした性質は、まさにこの教材が「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し

効果的に表現する資質・能力」の育成を目指す国語科の目標と強い結びつきを持つものであることを示しているといえる。このような魅力に満ちた「日本語による国際交流」が、今後も教育活動で広く取り上げられることに期待を込めるとともに、稿者も国語科としてさまざまな視点から豊かな言語活動を構想し、実践していく決意である。

【引用・参考文献等】

- ・ 文部科学省, 2018, 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』, 東洋館出版社
- ・ 文部科学省, 2024, 「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会 論点整理」, pp3-4
https://www.mext.go.jp/content/20241003-mxt_kyoiiku01-000038070.pdf 最終閲覧日 2025年2月7日
- ・ 文部科学省, 2024, 「新時代に対応した高等学校改革推進事業」（事業概要）
https://www.mext.go.jp/content/20250115-mxt_koukou02-000021137_01.pdf 最終閲覧日 2025年1月23日
- ・ 文部科学省, 2023, 「令和4年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業」, 「北海道伊達開来高等学校」（成果物関係）
https://www.mext.go.jp/content/20230731-mxt_koukou01-000030726_1.pdf 最終閲覧日 2025年1月23日
- ・ 文部科学省, 2024, 「令和5年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業」, 「北海道伊達開来高等学校」（成果物関係）
https://www.mext.go.jp/content/20240531-mxt_koukou02-000035680_05.pdf 最終閲覧日 2025年1月23日
- ・ 戸川貴之, 2022, 「Facebookでのつながりを活用し、日本語で世界と教室をつなぐ実践の可能性」, 『国語探究』1号
<https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/record/10754/files/kokugotankyu-1-08.pdf> 最終閲覧日 2025年2月19日
- ・ 文部科学省, 2016, 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
最終閲覧日 2025年1月23日
- ・ 野中潤, 2019, 『学びの質を高める！ ICTで変える国語授業－基礎スキル&活用ガイドブック－』, 明治図書

(いのぐちゆうた／北海道伊達開来高等学校)